会報

〒183－8534
東京都府中市朝日町3-11-1
東京外国語大学
ロシア語渡辺研究室内
東京外語ロシア会
TEL＆FAX 042-330-5265
振替口座 00110-8-22338

新たなるソボールノスチを求めて

ロシア会会長　渡辺　雅司

原卓也先生が亡くなられてそろそろ半年になるというのに、その実感がいまだにない。「ハイな！」というあの軽やかな声が今にも聞こえてくるような気がするのだ。声を失われてから一度もお会いしていなかったので、余計そう思えるのかもしれない。

思えば私にとって原さん（直接教わっていないのでこう呼んでいた）は運命の人だった。人生の節目にはきまって原さんの影があった。外語に戻る時もそうだった。旧外語のお雇い外国人メーチニコフの「回想の明治維新」（岩波文庫）を訳したばかりだったので、運命だと思って京都から単身赴任したのはもう二十年前のことになる。

原さんの「お別れ会」の席で先輩諸氏、とりわけ原さんと同期の方々から「ロシア会の会長は君がやれ」と言われた時はとまどった。若すぎるからと固辞するつもりだった。ロシア会総会直前まで決心がつかずにいたのだが、その前夜、「ガジおまえやれ！」という懐かしい声が聞こえてしまったのである。“ガジ”という私の綽名を外語ばかりかロシア文学界にまで広めたのも原さんだった。よくよく考えれば若手と思っていた私も今年は還暦、定年までの残年もわずかとなり、OBと現役をつなぐのは自分しかいないのかと思い至り、荷が重いが会長をお受けすることにしたのであった。

追悼　原卓也先生　沼野恭子　桑野隆　中平耀　2
ロシア会総会・懇親会・新役員　渡辺雅司　4
府中だより　日下直子　5
私たちの『桜の園』「ロシアは誰に住みよいか　現代編」　東佐智子　6
日露戦争でも「ゾルゲ」が暗躍　名越健郎　7

今年は日露通好条約から一五〇年、日露戦争一〇〇年にあたる。そしてロシア会の産みの親八杉貞利が留学先のペテルブルクから外語に着任するのもちょうど一〇〇年前のことである。一九二五年に海外視察から戻った八杉は、日露協会学校（後のハルビン学院）の出現と、大阪外語の新設に危機感をつのらせる。それまでの東京外語の独占的地位が揺らぐと思わされたのだ。

そこで八杉は一計を案じる。それまでも露語部の学生・卒業生は神保町あたりで集っていた。それを「露西亜會」として組織することにしたのである。革命後の混乱の中で、新生ソ連の情勢を知るべくソ連から来日した作家や学者（ピリニャーク、コンラッド、シェヴィリョーフ）や駐日大使、蔵原惟人や磯村英一といったOBの専門家を招いて講演会を開き、ロシア語教育の補完をはかったのであった。そう、今年はロシア会の80周年でもあるのだ。

初期の露西亜會の活動には目をみはらされる。大学にはその頃の会報が残っているが、年二回の発行にもかかわらず数十ページの立派な雑誌となっているのだ。主に学生幹事の力によると思われるこの会報は、今では第一級の歴史資料ともなっている。またチタ、満州里、ウランウデなどシベリア各地には支部網がめぐらされていた。

今日グローバリゼーションのもとにアメリカ化が急速に進み、多くの大学でロシア語が第二外国語からはずされている。これは何十人もの大学院生を抱える本学にとって由々しき事態である。また日露両国間の経済関係改善の努力（現に今も私と同期でモスクワの日本センター長の朝妻幸雄氏から電話、経済ミッション招請のため一時帰国中とのこと）にもかかわらず、ロシア語科の就職状況は決してよくはない。そうした逆風の季節だからこそ、ロシア会の果たす役割は大きいと言えるだろう。日露関係の最前線で活躍されてきた先輩諸兄姉の存在は学生たちにとってとても大きな励みになるし、ロシア以外のどんな分野に進まれているかが分かるだけでも希望がふくらむものである。

再生ロシア会は、十年前の「原学長を労う会」を機縁に始まった。今年度のロシア会総会は原先生の一周忌を兼ねている。「原卓也先生を語る」というシンポジウムも組んでいる。深秋の一日、原先生を偲んで、若い学生諸君と語り合う機会をぜひ持とうではないか。そこから生まれるであろう新たなるソボールノスチに私は期待をかけたい。

（昭44・東京外国語大学教授）

二〇〇四年十月二十六日、原卓也先生が不帰の人となられた。学長をお辞めになってから約八年の闘病生活だったが、ロシア会にいらしたときなど、笑みを絶やさず、かえって先生の方が周囲に気配りなさるのだった。十一月十四日の学士会館でのお別れ会には、大勢の教え子、大学関係者など五百人を越える人が集まった。

原卓也先生　追悼

沼野　恭子

敬愛する原卓也先生が逝ってしまわれた。

何より残念でならないのは、最後、声帯の手術をしてから、あの美しい声を無くされたことだ。学生時代、先生の朗読してくださるロシア語にどれほど憧れたことだろう。潤いのある声音、どこか人なつこく、それでいて切なげな抑揚。今でも聞こえてくるような気がする。

わたしたちのそばには、鮮やかな真紅のラシャを張った　橇がおいてある。

外語大の二年生のときだったと思う。チェーホフの短編「たわむれ」を講読なさる先生の授業を受けたのは。毎回、学生にひととおり訳させてから、先生が、まとまったパラグラフをよどみなくロシア語で読みあげ、同じくらいよどみなく日本語訳をつけていかれる。そのいずれもがあまりに素晴らしいので、心底うっとりしたことを覚えている。先生の授業は、芸術行為そのものだった。

橇は弾丸のようにとぶ。断ちきられる空気が顔を打ち、咆えたけり、耳もとでうなって、怒りのあまり肌を引き裂くほどの痛みを与え、肩から首をちぎりとろうとする。

その年の夏、友達とロシアに行ってきます、と先生にお伝えすると、セルゲイ・アントーノフという作家のお嬢さん、オリガさん宛に紹介状を書いてくださった。オリガさんは、当地のコメディ劇場の看板女優。レストランにいると、ファンがサインをねだりにきて、なんで東洋の女の子が一緒にいるのかしらと怪訝な顔をしていく。それほどの人気女優なのに、先生の紹介状のおかげで、オリガさんはわざわざ私たちを自宅に呼んでご馳走し、主演する芝居まで見せてくれた。

こちらは、たどたどしいロシア語で、「東京の大学で原先生のチェーホフの講義を聴いています」と話したのではなかったか。

橇がとまると、ナージェージカはたった今滑ってきたばかりの山をふり仰ぎ、それから永いこと、わたしの顔を見つめ、いとも冷静な、淡々としたわたしの声にきき入る。

このときのロシア体験が私のロシア文化への関わりを決定的なものにしたのだから、先生にはどれほど感謝してもしきれない。その後もいろいろお世話になったのに、ろくに恩返しもできずにいるうち、先生は逝ってしまわれた。

二〇〇四年十一月十四日に行われた「お別れの会」では、僭越ながら司会を務めさせていただいたが、自分自身の声が悲しみで震えないようにするのが精一杯で、つらい大役だった。

可哀そうな少女は、さながら、その風にもう一度あの言葉を聞かせてと頼むかのように、両手をさしのべる。そこでわたしは、風のくるのを待ち受けて、小さな声で言う。

先生のお声がもう一度聞けるのなら、私も両手をさしのべて不思議な風が吹くのを待とう。いや、できるものなら、真紅のラシャを張った橇を走らせ、風と紛うそのお声を、永遠に聞いていたい……。

（引用はすべて原卓也先生訳チェーホフ「たわむれ」より）

（昭55・東京外国語大学非常勤講師）

人生の恩師　原先生

桑野　隆

ひとりの先生との出会いが学生を救ったり生き方そのものを変えるようなケースは、いまではごくまれかもしれない。

ところが、私ども同級生やその何年かあとまでの卒業生には、「外語大に原先生が居られたからこそ自分は救われた」と深謝している者が何人もいる。私もそのひとりである。学業はむろんのこと進路や生活そのものに関してまでも、先生はつねに私たちのよき相談相手であられた。

そうしたなかでも、私たちの学年と先生との結びつきはひときわ密であったように思われる。これには、自分たちが外大に入学した一九六六年にちょうど先生が赴任されたことも関係していよう。私自身ものちに教員になって幾度か経験したが、どうやら、赴任一年目の学生とは格別に緊密な関係になるようだ。当時すでにロシア文学界の第一人者となられていた先生は、翻訳のほうでもすこぶる多忙であったが、私たちの相手にも人一倍時間を割いてくださり、またそうした関係を私たちも誇りにしていた。

ときには、調子に乗って先生のご自宅にまでおしかけることもあった。二〇人近くが泊り込んだこともあった。いまから思えば、奥様に大変なご迷惑をおかけしたにちがいないのだが、学

生にとっては至福のひとときであったことは確かだ。この喜びが忘れられぬ私など一〇名近くは、卒業後も毎年一月二日に先生宅を訪れるようになり、にぎやかに酒を酌み交わしては、いまだに近況報告かたがた夢や悩みを打ち明けているしだいである。

「いまだに」などと書けば、先生が逝去されたのは昨年の一〇月二六日なのにと訝る向きもあろうが、いやそもそも不謹慎に思われる向きも少なくなかろうが、じつは今年も例年どおりお邪魔に上がってしまった。奥様からお招きの言葉を頂戴したこともさることながら、やはり今年も先生の前で酒を飲みながらあれやこれやと語り合いたかったのだ。何のことはない、「いまだに」先生と奥様に甘えさせていただいているわけである。

とくに私の場合は、卒業後もロシア文学関係の仕事や「ロシア手帖」の作業などご一緒させていただくことが多かったが、先生はいつどこでも率先して動かれるとともに皆への気配りも怠らなかった。それは性癖といってもよいくらいで、相当ご酩酊でも相変わらず各自の様子や飲食の進み具合を気遣うさまなど、微笑ましくもあった。そういう場に慣れすぎたせいか、私などはいまなお先生がすぐそばであたたかく見守ってくださっているような気がしている。いつまで経っても教え子気分が抜けない。

（昭45・早稲田大学教授）

原さんのこと

中平　耀

原さんはロシア文学界の誰もが知る大きな足跡を残した。思えば、終戦後間もない学生時代、彼と私はクラスが別だったので特に親しい交遊はなかったが、トルストイの翻訳で有名な原久一郎氏の御曹司は、戦後の荒れた学生たちの中にあって、細身の体に自然に漂う都会的な洗練、繊細で真面目な風貌、そして眼鏡の奥に光る理知的な眼が印象的だった。

私が編集者だった時代の一九七〇年代半ば、他の部署でトルストイの民話を幼年絵本の一冊に入れる企画があり、担当の友人の編集者に原作のリライトを頼まれたことがあった。予め連絡して原さんのお宅に相談に伺ったところ、原本をコピーしておいてくれた。その細やかな配慮に感じ入った。夏の暑い日で、奥様心尽くしのおツマミとビールで真っ赤にうだったのを覚えている。こうして『ななつのほし』という絵本が出来上がったのだった。

また、ゴーゴリやドストエフスキーを読んでいて分からないことがあったので原さんに手紙で尋ねたことが二度あった。実に懇切丁寧な説明が返ってきた。そのうちの一つは用紙10枚以上にも及んだ。そういえば、東郷正延先生も和久利誓一先生も、私の手紙の質問に極めて親切に答えて下さったものだった。

集英社の『世界の文学』にマンデリシュタームの詩を訳さないかと原さんから誘いを受けたのは一九八八年頃だったろうか。それ以前から私は、仲間と始めた翻訳詩だけの小さな同人誌に、毎号細々と一九一〇年代のロシアの詩、特にマンデリシュタームの詩を訳し、雑誌が出る度に原さんに送っていたのだが、その都度、「ぼくは詩は分かりませんが…」という謙遜の言葉を添えた礼状をもらっていた。そんなことで原さんは私のマンデリシュタームに注目していてくれたのだと思う。有難いことだった。おまけに同書に20世紀のロシア詩の解説まで書かせてくれた。三年前に上梓した『マンデリシュターム読本』を贈ったときも、「ぼくは詩は分かりませんが…」という例の謙遜の言葉のある礼状をもらった。

これらのことは、私の中に温かく仕舞ってある極めて個人的な原さんの思い出である。大分前から病気だとは聞いていたが、生来迂闊な私は、原さんが昨秋亡くなるまでそんなに病状が進んでいるとは思わなかった。不明を恥じ、ただご冥福を祈るのみ。

二〇〇五・一・二五

（昭26・齋藤　登　詩人）

ロシア会総会・懇親会

二〇〇四年度のロシア会総会・懇親会は昨秋十一月二十日、外語祭開催中の府中キャンパスで行われた。会長の原先生ご逝去のあと間もない総会は原先生のご冥福を祈ることから始まった。会計報告、会報の報告と承認のあと、新田實先生が、新会長に渡辺雅司教授を推薦され、満場一致で承認された。会場を生協食堂に移しての懇親会は原先生への献杯で始まった。新田先生、渡辺先生の挨拶のあと、竹内正実氏のテルミン独奏、竹内氏が指導されているグループの合奏を聴いた。テルミンという楽器についての竹内氏との一問一答で楽しい進行役をしてくださったのは滝川ガリーナ先生。懇親会は会場のあちこちで懇談の輪ができ、在学生の参加もあって、賑やかだった。

ロシア会新役員名簿（任期三年）

会　長　渡辺雅司（昭44）
副会長　古茶兵衛（昭25）新田　實（昭29）
幹事長　会長兼務
副幹事長　鈴木義一（東外大助教授）
財務　大浩義之（昭43）池田英友（昭43）
会計監査　佐藤純一（昭29）
　　柴田富佐子（昭30）
会報　小沼利英（昭42）町田裕子（昭34）
総務　井上　勝（昭25）森本良男（昭30）
　　児子　明（昭32）清水国安（昭32）
　　中澤孝之（昭36）野島明子（昭43）
　　田島信元（昭46）山崎博子（昭53）
　　高村聖木（昭56）岸本正寿（平12）
顧問　米川哲夫（昭20）相馬守胤（昭25）
学生幹事　横田　愛（四年生）畑　歌織（三年生）小林敦子（三年生）竹内真佐子（三年生）梶　真寿美（三年生）高橋和湖（三年生）成島兼次（三年生）小西美緒（二年生）鈴木千明（二年生）井出尚美（二年生）西野祐貴（二年生）

二〇〇五年度ロシア会は十一月十九日（土）午後、府中キャンパスで開きます。

府中だより

独立法人化一年目の今年度は、ただただ慌しく過ぎた感があります。運営交付金削減の見通しとそれにともなう専任教官ポストの凍結、非常勤講師枠の縮小、個人研究費の大幅減少と、学内にはうそ寒い空気が流れています。

そんな中で、ロシア語科（今はこの名称はなく、なんとも無粋なロシア語専攻となっている）は、新任教員を迎えました。磯谷孝教授の後任として昭和六一年卒業の匹田剛助教授が四月一日付けで着任、ロシア語学を担当しております。

▼大学をめぐるこうした大状況とは関係なく、ロシア語科では今年もさまざまなイベントがありました。外務省のトラブルで三年ほど中断していたロシア・ミッションの一行十四人が六月二十三日本学を訪れました。外語と同じくこの代表団も女性上位、男性はたったの二名、しかもとびきりの美人ぞろいで、大学中の熱い視線を浴びました。滝川ガリーナ客員助教授の授業に加わった彼らは、実に活発に質問し、それに負けじと奮闘する学生諸君の姿が印象的でした。驚いたことにロシアの若者たちはもはやブラート・オクジャワを知らず、趣味はボーリング、テニス、乗馬、アルバイトはモデルと今どきのロシアを反映しています。「余暇をどう過ごすのか？」という質問には、劇場や展覧会という答。「劇場に行かないの？」と問われ、日本人学生はお金がないからとただ下を向くばかり。今回の代表団は地方都市（エカチェリンブルク、ペルミ…）の出身者が多いにもかかわらず、すでに現地で本学の学生と親交を持っているケースもありました。それほど学生レベルでの友好は広がっているのです。

毎年二十名ほどの学生がロシア各地の大学に留学するというなんとも羨ましい現象（私たちの学生時代には留学など夢のまた夢）は、今年も続いています。テロ事件などに巻き込まれないことを祈るばかり。また旧ソ連圏からの留学生も十名以上おり、エレベータなどでロシア語が聞こえてくることもありますから、時代は変わっています。

▼第二回ロシア語週間。昨年から始まったこの催し（日本ユーラシア協会、ロシア外務省の主催）が、十一月二十九日、本学で開催。前プーシキン大学学長で名著「百万人のロシア語」（この教科書で学んだOBは多いはず）の編者コストマーロフ氏の講演と、ヤロスラーヴリ国立劇場の名優セルゲーエフ氏の一人芝居「セルゲイ・エセーニン」があり、一五〇名ほどの学生たちはエセーニンの詩の朗読と、ロシア語の美しさに酔いしれました。感激のあまり外務省の担当者と滝川ガリーナが泣き出すシーンまでありました。学生たちにはいい刺激です。

中野健三基金シンポジウム「永遠と一日、または21世紀のチェーホフ」（一月十四日）十年前モスクワ留学中に不慮の事故で亡くなった中野健三君のご遺族のご寄付を基金とし、今年で九回目のもの。没後百年のチェーホフについて、亀山郁夫教授の司会で東京大学の沼野充義、浦雅春教授の講演がありました。「チェーホフ」（岩波新書）を出したばかりの浦教授の「チェーホフ文学は脱中心化であり、至る所が中心である」という言葉が印象的でした。これを機会に学生たちがチェーホフをはじめとするロシア文学を読んでくれるといいのですが、ロシア文学を専攻する学生は、今では少数派です。

▼「タルコフスキーとズヴヤギンツェフの世界―虚空への帰還」――一月十三日、昨年ヴェネツィア映画祭で金獅子賞を取り、世界中の脚光を浴びたロシアの若手監督ズビャギンツェフ氏を招き、処女作「父、帰る」の上映と、沼野充義、西谷修（本学大学院教授、フランス哲学）、ズビャギンツェフによるシンポジウムが開かれ、一〇一マルチメディアホールは超満員、舞台の二つのスクリーンにタルコフスキーとズビャギンツェフのビデオを流しながらの講演と、深い精神性を秘めた映像に異様な空気がはりつめていました。会場からは学生たちが、次から次にきれいなロシア語で鋭い質問を浴びせるのでびっくり、他語科の学生、教員たちもロシア語科の学生のレベルの高さに言葉を失っていました。司会はこれも亀山郁夫教授。亀山氏は大変なアイデアマンで、学内のさまざまなイベントを仕切っています。一月末からの三週間にわたるシンポジウム「グローバリゼーションと多文化的想像力」は、内外から多くの講演者（今をときめく作家の米原万里さんも）を招き、外語大あげての一大イベントになりましたが、この企画の仕掛け人も亀山教授です。七階の研究室は下働きの学生、院生がしきりに出入りし、さながら参謀本部の感がありました。とまれこうした教員たちのエネルギー、熱気が学生たちに感染していくことを期待したいものです。

このように盛り沢山の一年でしたが、ロシア会では学生幹事の力を借りてこのたびホームページを立ち上げました（http://www.tufs.ac.jp/st/club/russianparty/）。今後はこうしたイベントに関する詳しい情報を流しますので、ご参加のほどを。原則的にすべて無料です。また創刊以来の「ロシア会報」のバックナンバーも載せるつもりです。創立八十周年、二千有余名の会員を擁するこのロシア会の全貌が段々と見えてくるはずですので、今後ともお力添えください。ロシア会へのご要望、あるいは外語の思い出などもお寄せくだされば幸いです。また昨年から語劇支援のプロジェクトに文部科学省から六〇〇〇万円もの助成金がつきました。私自身語劇のアーカイブの責任者なので、語劇にまつわる思い出やアドバイス等もお送りください。

（渡辺雅司記）

私達の『桜の園』

日下　直子

今年度最初の語劇会議は、五月下旬に行われた。つまり私達は外語祭まで六ヶ月もの間、語劇に取り組んでいたことになる。むろん平坦な道のりではなかった。

最初に立ちはだかったのは台本の問題である。今年はチェーホフ没後百周年にあたり、大多数が『桜の園』を推したが、問題はその長さ。二時間という与えられた時間で脚本そのままに演じきることは不可能であり、台詞をカットせざるを得なかった。ガリーナ先生に多大なるご協力を頂き、七月上旬には役者達に台本を配ることができた。

台本作りと並行して、日本語で読み合わせを行い、マリンスキー劇場のビデオを見てそれぞれの役のイメージや自分が希望する役を考えたりした。

夏休みには四回も全体練習を行った。ここに役者達のモチベーションの高さが表れていると思う。一回につき一幕、つまり夏休み中に一通り四幕を通すことができたのである。さらに夏休み中に台詞を全部暗記するという酷な課題まで出してみた。さすがに全員はこの課題を達成できなかったが、外語祭での成功の大きな鍵はこの期間にあったと言って間違いないだろう。

しかしながら全てが順調に進んだわけではない。最大の問題は演出家の不在だった。そしてこれこそが今年度の語劇の「私達らしさ」でもある。演劇経験者が役者にまわった結果、練習中に全体を見ているのは代表者と副代表者の二人のみ。しかも二人とも芸術にはとんと疎く、はっきりした指示ができないことも多かった。自分でも歯がゆく、役者達には申し訳ないばかりだったが、だからこそ逆に「全員で考え全員が意見を出す」スタイルができたのだろう。役や台詞について本人と演出家のみで考えるのではなく、様々な意見を出し合い、また聞くことで演技を決定していく過程は、役者達には大変な負担だったかもしれない。しかし全員で『桜の園』に対する考えを共有することにとても良い効果をもたらしたと思う。

二〇〇四年外語祭　「桜の園」の上演を終わって

夏休みが終わり、練習もいよいよ大詰めを迎えた。早朝、昼休み、土・日と空き時間はほぼ語劇に費やされた。モチベーションの高さは裏方の人達にも言える。照明・音響・字幕、どれも演技とのタイミングが非常に重要なので、可能な限り役者達の練習に付き合い、何度も話し合いを重ねた。大道具も大語科ならではの素晴らしいものができた。

本番では、多くの観客を前に緊張しながらも六ヶ月の成果を存分に発揮できた。さらに急遽決まった追加公演も、宣伝不足による心配をよそに、多くの方々に楽しんでいただくことができ、思い出に残る語劇となった。

（二〇〇四年度ロシア語専攻　語劇代表者）

役者の感想（抜粋）

・皆がそれぞれのアプローチによって一つのことに向かっていくのは圧巻だった。

・語劇を通して演劇の面白さを実感し、専攻語に対する愛着が深まった。

キャスト

ラネーフスカヤ	横山　愛
アーニャ	亀崎美穂
ワーリャ	小西美緒
ガーエフ	大澤　拓
ロパーヒン	桑野　雄
トロフィーモフ	福田　祥
ピーシチク	西野祐貴
シャルロッタ	鈴木千明
エピホードフ	一瀬友太
ドウニャーシャ	下貂みのり
フィールス	小川理央
ヤーシャ	栫　美幸
客たち	井手尚美
	刑部　愛
	中井理絵

スタッフ（チーフ）

代表	日下直子
副代表	中村千宏
音響	喜田村優雅
字幕	岡崎　綾
照明	梅田洋平
プロンプター	堀口大樹
大道具	中村和裕
小道具	村瀬　悠
美術	石澤　恵
広報	飛田美由紀
指導	滝川ガリーナ先生
	エレオノーラ・サブリナ先生

外語の語劇には百年の歴史があります。今年二月一日発行の「東京外語会会報」一〇三号で語劇の特集をしており、歴史にも簡単に触れています。昨秋の各語劇についても短評がありますが、「桜の園」については大変褒めてあります。ロシア語を学び始めて丸一年にならない二年生が「桜の園」全幕を上演し、観客に感動を与えたことに拍手を送りたいと思います。

（編集子付記）

「ロシアは誰に住みよいか ―現代編―」

東　佐智子

当たり前のことであるが、ロシアは広い。東京で生じた現象が瞬く間に国土の隅々にまで波及する日本とは異なり、ロシアではモスクワで起こったことがペテルブルクにすら届くとは限らない。ペテルブルクでの生活が8年目に入る私にとっても、今でもモスクワは外国みたいなところである。両都市間では物価はもちろん、地下鉄の発券システム、外貨両替の仕方などに至るまで全く違う。大体私は日本との往復の際にも、シェレメチェヴォ空港なんていう怖い所は通らず、アクセスのよいヨーロッパ経由便を利用している。そもそもヘルシンキなどの隣国の首都の方が、地理的にも近いところにいるのである。

こんな具合だから、「ロシアからの現地報告」を日本から頼まれた時が一番困るのだ。私に出来るのはせいぜい、「ペテルブルクからの現地報告」である。私は、モスクワはおろか、ましてやロシアの地方で起こっていることなど全く知らない。日本人のほとんどが、マスコミのモスクワからの報道をロシア全土の現状であるかのように信じてしまっているのには、日本に帰ってくる度に違和感を覚える。

前置きが長くなったが、このように日本人の感覚をはるかに超えるロシアの広大さは、当然この国の統治の難しさに直結していると思う。最近日本でも報じられている、年金生活者らに対する交通費免除などの優遇措置廃止を巡る混乱もその一例であろう。

この騒動は元々、昨年12月まで年金生活者などはバスや路面電車などの公的交通機関を無料で利用することが出来たが、今年からこの優遇措置が廃止されたことに端を発している。ロシア政府によれば、ここ数年優遇者の数が増え続け、交通機関の赤字を膨らませる原因になっていたという。度重なる運賃値上げを抑えるためにやむを得ない措置だったというわけだ。しかしこれに猛反発した都市部の年金生活者がデモを強行するに至った。

私もペテルブルクでのデモに遭遇した。同市出身のプーチン氏が大統領に就任して以来、各国政治家の来訪に伴う突然の交通規制と渋滞には慣れっこであったが、このデモによる交通麻痺は規模が違った。年金生活者といえば、戦争と粛清の時代には単一の国家理念を信じることを強要された挙句、充分歳をとった頃に突然無法な弱肉強食社会に放り出された、今日のロシアでは最も同情されるべき存在である。しかし暖冬とは言え雪空の下、路上で何時間も待たされるこちらもたまったものではない。かろうじて捕まえることの出来た乗合タクシー(注)の中で、堪忍袋の緒を切らした一人の若者がこう叫んだ。「なんで警察は年金生活者だけを守るんだ。僕らだって守られる権利はある！」するとそこから乗客たちの議論がやんやと始まったのである。

この街の人は一般にとても議論好きだ。こうして議論が始まると、皆堰を切ったように自分の意見を述べ始める。見ず知らずの他人に対しても「あなたは間違っている」などと平気で言う。これは日本ではまずあり得ない光景だろう。気がつけば延々と迂回するタクシーの中で、傍聴席にまわったのは私一人だった。それぞれにそれなりの理があり、他人行儀に聞いている分には非常に面白かったが、間もなく自分も年金生活者になるという一人の女性の意見が、特に私の注意をひいた。

「そもそもこの広いロシアで年金が一律同額ということ自体が無理なのよ。」現在の年金は一人あたりおよそ月額千六百ルーブリ（約六千円）。ペテルブルク市内の交通運賃は一回10ルーブリで、今回の法改正により、年金生活者は300ルーブリのクーポンを買えば運賃割引を受けられるというシステムになった。物価感覚の参考までに、ペテルブルク市中心部で2DKのアパートの賃貸料は月額300ユーロから500ユーロが現在の相場(ロシア人料金)。私が常備する風邪薬は一箱200ルーブリ。元々ペテルブルクでは年金だけで暮らしていくことはほとんど不可能に等しいのだ。もっと物価の高いモスクワでは、なおさら厳しいであろう(モスクワでは今回の騒動はデモだけでは収まらず、車掌に対する暴行事件まで発生したと聞いている)。

一方田舎の物価の安さは、都市部の感覚からは想像もつかない程だという。上述の女性の実体験に基づく話では、田舎に住む人はバスなどにはほとんど乗らなくても生活できるし、そもそも千六百ルーブリの年金で充分穏やかな余生を過ごすことが出来るという。

少々話が逸れるが、あるロシアの報道番組によれば、チェチェンのテロリストが自爆死すると、テロ支援組織から遺族に平均千五百ドル支払われるという。チェチェンではこれは家族を当面養っていくのに充分な額なのだとか。たった千五百ドルのために自爆者が後を絶たないのだ！話を戻すと、ロシア国内で金銭感覚にこれほど大きな格差があるとも言える。

現在のロシアが半ば制御不能状態に陥っているのも、広大過ぎる国土を持った国家の宿命なのかもしれない。陽光に恵まれないペテルブルクの冬空の下では、とかく悲壮感が支配的になる。そんな中、真剣に議論を交わした初対面の老若男女が、「ありがとう」と握手をして車を降りていった。彼らの姿に「まんざら悪いことばかりではないな」と感じた。

(注) 非公的機関の運営するワゴン車タイプの路線タクシー。全ての乗客が有料。路線間ならどこでも乗降可能で、バスなどの公的交通手段よりもスピードは早いが、運賃が約15倍から2倍かかるので、利用者は比較的多忙で裕福な層が多い。

(平7・院博士前期課程平11・ソプラノ歌手、音楽ジャーナリスト　マリインスキー劇場付属アカデミー所属)

日露戦争でも「ゾルゲ」が暗躍

名越　健郎

日露戦争（一九〇四―〇五年）百周年に際し、敗戦国・ロシアでも昨年から今年にかけて、日露戦争に関する書籍や雑誌の特集号が次々に出版されている。大半は記事にするほどインパクトはないが、今年初めに刊行されたモスクワ工科大学のドミトリー・パブロフ教授（歴史学博士）の『露日戦争―一九〇四―〇五年』（マテリク出版）は、日露両国の諜報合戦をロシア側の史料に沿って描いたユニークな内容だった。

特に驚いたのは、フランス紙の東京特派員が日露戦争中、ロシアのスパイとして日本で活発な諜報活動を展開し、御前会議や元老会議の討議内容まで入手してロシアに通報していた、という史実だった。

日露戦争の情報戦では、日本軍の明石元二郎大佐による革命誘発を狙った対露諜報工作がよく知られている。昨年二月に出版された月刊誌「ロージナ」の日露戦争特集号も、日本が旧満州（中国東北部）一帯に中国人やモンゴル人を使って強力な情報網を構築したことを紹介し、「ロシア帝国の敗因は、日本を軽視し、情報収集・分析を怠った情報戦の失敗にある」と指摘していた。しかし、同書を読むと、日本が百年前からスパイにとって活動しやすい土壌だったことが分かる。

パブロフ教授がロシア帝国外交史料館で行った調査によれば、日露開戦で外交官らが日本を退去した後、ロシアは上海に日本情報の収集拠点を設置し、アレクサンドル・パブロフ元駐朝鮮公使が司令塔となった。パブロフは一九〇四年六月、上海に立ち寄ったフランス紙「フィガロ」の東京特派員、バレー記者をフランス外交官から紹介されて面会。ロシアのスパイとして働くよう勧誘し、承諾を得た。

バレーの年齢や経歴、報酬などは明らかでないが、「日本語を自在に操り、日本の政府や陸海軍、金融界、軍産複合体などに知人が多く、中立国の硬派紙記者という特権を利用し、政府高官も部屋のドアを開けざるを得なかった」という。

ジャーナリストとして日本各地を訪問。大阪、福島、小倉、名古屋、金沢、姫路、下関、神戸、佐世保など軍事都市を訪れ、軍艦の訓練や修理状況、兵器の種類、病院の負傷者数、軍上層部の人間関係など詳細な機密情報を調査した。

活動の中心は日本の政治、経済、金融情報で、「日本外務省や参謀本部の高官と会談して情報を入手し、御前会議や元老会議で問題がどう討議され解決されたかをしばしば知り得た」という。

バレーは約十カ月にわたり、計三十本の報告を暗号にし、横浜から船便で上海のパブロフの下に送った。報告を基に、パブロフは日本軍の〇五年三月の奉天（現瀋陽）攻撃を予告したり、日本による「クロパトキン極東軍総司令官の威信失墜宣伝」「バルチック艦隊の極東回航妨害工作」を本国に警告したという。ただし、司馬遼太郎の『坂の上の雲』によれば、極東回航妨害工作は誤報で、バルチック艦隊はこの情報に振り回され、戦う前から疲弊したもようだ。

バレーの報告には、日本社会の鋭い分析も含まれ、日本政府や新聞の勇ましい喧伝と裏腹に、日本の財政が破綻寸前だったことや、国防予算があらゆる産業を圧迫し、金融崩壊を招いたことを指摘していた。

「日本の産業全体が荒廃している。小売業は存在せず、住民は農村に疎開し、大都市の商店街は閉鎖された。多くの大企業も銀行の融資が続かず、操業を停止している」「都市住民の困窮はひどく、自殺者も多い。重税に苦しむ貧困層は支払いを拒否し、所持品を売りさばいている」「徴兵年齢が四十二歳まで引き上げられ、国民の不満を高めている。東京を含め、あらゆる地域で略奪が始まり、反戦気運も強い」

ロシア帝国指導部がこれらの報告をじっくり検討し、長期戦に持ち込んでいれば、日露戦争の帰趨は変わっていたかもしれない。しかし、ニコライ二世は国内の革命機運を憂慮し、米国の調停を受け入れて日露戦争の早期終結を選択した。

バレーは〇五年四月、スパイ発覚を恐れて日本を離れた。ラブロフ教授は、「バレーは上海に置かれたロシア諜報部の最大の情報源だった。日本の機密情報を入手するという諜報部の任務はバレーのおかげで解決した。しかし、彼が出国した後、ロシアの情報収集能力は衰えた」としている。

このフランス人記者の活動は、日米開戦前夜、東京を舞台に機密情報を入手し、モスクワに打電した旧ソ連のスパイ、リヒャルト・ゾルゲを彷彿とさせる。ドイツ紙東京特派員だったゾルゲも、同盟国の硬派紙記者を隠れ蓑に、日本の政財界や軍部に浸透、八年間にわたって機密情報を自在に入手していた。

ゾルゲは奔放かつ魅力的な知識人で、日本各地を訪れ、戦前の日本社会について鋭い分析を報告した。バレーもゾルゲのように、魅力的かつ活動的な知識人だったとみられる。欧米知識人に対するコンプレクス、ずさんな情報管理、安易な漏えいなど百年前から現在もそのまま通じる日本人の諜報への脇の甘さが、バレーやゾルゲのスパイ活動を可能にしたといえよう。

ゾルゲといえば、昨年十一月七日が処刑六十周年で、ロシアではゾルゲに関する本が何冊か出版され、テレビも特別番組を放映した。NTVテレビの特番では、筆者も招かれ、下手なロシア語でコメントしたが、ゾルゲは単なるスパイではなく、愛国的な情報機関員だったとする編集姿勢が印象的だった。

近刊の書籍では、独ソ開戦情報など

（次ページ4段目につづく）

会計から

ロシア会の会費は、外語会の会費とは別立てになっており、つぎの通りです。

終身会費
三万円（振込料　一二〇円）または
年会費
二千円（振込料　七〇円）

納入頂いた状況は左表の通りで、前年度に比べ終身会費を納入された方は六名増加しましたが、年会費を納入された方は十九名減少しました。ロシア会復活の平成10年度約二百万円であった収入も、近年はその1／3以下となり、年間収支も四～五万円のマイナスが続いています。ロシア会の会員は現在約二千名、内　約千名の方が外語会の終身会費五万円を納入されておりますが、ロシア会へ終身会費を納入された方は現在まで一七〇余名に留まっています。ロシア会の活動を充実したものにするためには、どうしても資金的基盤の強化が必要です。皆様の一層のご支援を切望致します。

又、勝手なお願いですが、ご支援の形はなるべく終身会費でいただきたくお願い致します。

（追伸）会報送付の封筒の宛名頭部に○印のある方は終身会費か今回分の年会費納入済みの方なので払込票は同封してありません。

二〇〇二年度　終身会費納入者

（卒業年次順・敬称略）

中村四郎、岡村　博、遠藤春海
斎藤　肇、児子　明、山崎忠夫
大森直子、浦島芳之、野島明子
佐々木美恵子、蔵満美津子
村田由美子、杵渕久美、
原口由規子、高澤理恵

（十九名の内、四名の方は前年度会報に掲載されました）

ロシア会会計　池田英友
大浩義之

東京外語ロシア会2003年度収支

（2003年4月1日～2004年3月31日　単位 円、監査実施済）

1	収入	終身会費（19名、単価3万円）	570,000
		年 会 費（53名、単価2千円）	119,000
		利　息	166
		合　計	689,166

注.年会費には5千円や1万円など数年分を納入する例もある。

2	支出	会報制作費（印刷製本他作業代）	147,298
		会報宛名ラベル（支払先、外語会）	16,000
		会報郵送費	150,080
		払込票への印字費（支払先郵便局）	2,100
		霊園管理料（ミチューリン先生）	3,840
		懇親会への補助	386,334
		会議費（サテライト室料他）	5,990
		外語会報98号労作への慰労会費	19,110
		ロシア会リスト打出費(支払,外語会)	6,550
		雑　費（払込手数料、文具費）	740
		合　計	738,042
3	差引計算及び繰越金		
		差引不足金	▽48,876
		前期繰越金	3,460,240
		次期繰越金	3,411,364

ロシア会懇親会収支

（2003年11月22日実施、単位　円）

1	収入	出席者会費（卒業生51名　単価6千円）	306,000
		寄附	10,000
		本会計からの補助	386,334
		合　計	702,334
2	支出	会員宛案内費(太平社へ支払、1,948名への往復はがき代を含む)	235,645
		宛名ラベル代（外語会へ支払）	16,200
		料理代（支払先、外語生協）	400,000
		飲物代（支払先、村野商店とウオッカ代）	49,754
		払込手数料	735
		合　計	702,334

（7ページからつづく）

をもたらしたゾルゲの活動にスターリンが冷淡だったことを批判する論調が目立つ。ゾルゲの存在が初めて公表された一九六〇年代に続く第二次ゾルゲ・ブームが起きる気配だ。

旧ソ連国家保安委員会（KGB）出身のプーチン大統領は大先輩のゾルゲをひそかに敬愛している、という話を最近、クレムリンの当局者から聞いたばかりで、背後に大統領の思惑が働いているかもしれない。（了）

（昭51・時事通信社モスクワ支局長）

編集後記

◆今号は原卓也先生の追悼号となりました。昨年十一月十四日の「お別れ会」には大勢の教え子の方たちの姿があり、印象的でした。先生のご希望とのことで、ベニー・グッドマンの「グッドバイ」の音楽が会場を流れ、先生のいたずらっぽい笑顔が思い出されました。

◆新会長渡邉雅司先生が巻頭にロシア会八十年の歴史を振り返り、原先生の跡を継ぐ抱負を、四頁には大学をめぐる状況とロシア語関係のイベントについて詳しく書いていらっしゃいます。五頁は語劇の報告、在学生の頁です。

◆六頁と七頁はサンクトペテルブルグとモスクワからの現地だよりです。

◆学生幹事の努力でロシア会のホームページが開設されました。URLは四頁文中にあります。

（YM・昭34）